

世界遺産登録をめざすマレーシア： 遺産はなにを「語る」のか？

宇高 雄志*

いま、マラッカとペナンでは、歴史的町並みの保存が脚光を浴びている。両都市は、ユネスコ世界文化遺産への登録を目指している。特にペナンには、ほかのアジア都市では、すでに見られないほどの、面的な広がりがある、また建築学的に「美しい」ショップハウス群が市街地を埋めている。

筆者は、過去、日本の世界遺産や町並みの保存プロジェクトに参加し、学んできた。現在のペナンでの滞在では、マレーシアの世界遺産登録作業ほか、町並み保存をめぐるプロジェクトに参加できた。本稿では、町並み保存から見える、マレーシア社会の諸様相を描きたい。

法と理念の狭間で

マレーシアに限らず町並み保存は、文化財の保存の中でも、もっとも難しい。なぜなら保存地区は多くの私有財産で構成され、同時に、人々は今日もそこで生きている。私有財産を凍結する事はもちろんできない。生命や安全を守るための建築法の順守、将来的な開発との調和なども重要である。故に、建物が古く美しいだけでは、町並みは守れない。法の整備、予算問題、土地税制、防災、建築構造の改善、鑑定と修理、これらのテクニカルな命題を一つ一つ解決していかねばいけない。木材を用いた、熱帯気候にある建造物をマレーシアの独自の視点から評価する事が求められているが、技術的に難しい。

マレーシアには文化財保護関連法として、古物

保存法(Antiquities Act, 1976)があり、古文書から、町並みの保存をカバーしている。それに関連して、現在、都市計画法(Town and Country Planning Act, 1976)の一部に、「歴史的で良好な町並み」を規定し保存する条項の設定が検討されている。行政主体では、これらの連邦法が規定されると同時に、実施主体として、州の外郭団体となっているミュージアム・コーポレーションが文化財の認定と監視を行い、ローカルオーソリティーが都市計画法の下での再開発を含めた保存事業を担当する。

もちろん、こうした複数の法と行政主体が関与するプロジェクトの利害や関係性をクリアに理解する事は容易ではない。最近、はじめて連邦都市計画局より、都市計画法に規定される新条項のアウトラインが発表された。もちろん、そこでは文化財保護局の胸中は平穏ではないし、自治体レベルでも穏やかではない。

町並み保存の「語り」と選ばれる文化

町並み保存にも、マレーシアの多民族社会、また政治情勢が非常にクリアに反映する。マレーシアの古物保存法は、この国の政策的な、文化や宗教のあつかいをよくあらわしている。多くのモスクやコロニアル建物をモニュメントとして既に指定している。修復予算も着実に伸びており、注目すべきモスク

* マレーシア科学大研究員、広島大学建築学科助手

は比較的に高い水準で修理修復が行われている。

一方、世界遺産の登録準備作業では、ユネスコに指定範囲の核心地区(コア地区)と緩衝領域(バッファ地区)を「線引き」を示す必要がある。しかしこの線引き行為は、難しい。線引きを通じて、文化や遺産を選別せねばいけないからだ。マラッカには、世界遺産のコアとなる中心市街地以外にも、ポルトガルやチェットィアーのコミュニティーの居住地が存在する。一方、市街地のほとんどは中国系が占めている。予算的側面や、政治的判断を含めて、そのすべてを保存地区に指定することはもちろん不可能だ。

世界遺産登録では、いわゆる保存に向けたストーリーラインが重要である。遺産の保存を通じてマレーシアの文化の総体を語るのである。マラッカとペナンの場合、世界遺産の登録を通じて「多様な文化で構成される社会、建造物、歴史のユニークさ」をアピールすることを目指している。

しかし、そこで語られる多様さとはいったいなのか。また語られるべき文化や歴史とはなにか。世界遺産の登録範囲として規定される範囲＝選ばれた遺産と、範囲外の遺産の間には、文化の差別化が生じる。単一の民族文化や、たとえばコロニアル建物だけを取り上げるわけにはいかない。何を、なぜ残すのかが課題となる。また皮肉な事に、独立期のドラマ＝民族統一の正史が、そこでの語りにはなかなか見えてこない。

そもそも、今回の世界遺産登録は、元・海峡植民地のマラッカ、ペナンのジョイント登録が、各方面からのアドバイスを通じて目指されている。そのアプローチをとっても、なぜもう一つの海峡植民地シンガポールが抜けているのか。そして、なぜ英領植民地の支配体系＝海峡植民地が、多民族社会のユ

ニークさを語る源泉になっているのか。ここにきて、当地で忘れ去られて久しい史観への問いかけが再びおこりつつある。

ポリティクス:マラッカとペナン

海峡植民地では結びつけられる両都市も、優位政党および民族構成が異なり、保存に対する政治的受け止めが異なる。しばしば「チャイニーズ・ステート」と評され、ゲラカンが優勢なペナンと、比較的に連邦政府に近いマラッカでは世界遺産に対するまなざしも異なる。また、歴史的市街地にシンガポールからの観光客を大量に受け入れるマラッカと、リゾート地以外のもう一つの観光地として中心市街地をみるペナンとでは、産業界の受け止めも異なる。しばしば、町並み保存はその人口分布から「チャイニーズ・マター」として括られる。保存地区が野党優勢地区であれば、なおのことである。

歴史的市街地の保全は、市民運動の成果として捉えられてきた。たとえば、世界的な町並み保存運動の先駆けとなる、英国のイングリッシュ・ヘリテージは、しばしば、歴史的環境の保全について、政策主体以上の技術力と政策提言力をもち、また独自に資金源を定め、政策的・技術的開発を行ってきた。

マレーシアのこれまでの町並み保存は、イングリッシュ・ヘリテージの活動概念に影響を受けながら、地道な NGO の啓蒙活動や、絶妙なメディア戦略によって一定の市民権を得てきたといえる。しかし、そこでのイングリッシュ・ヘリテージのもつもう一面:メディア戦略にたけ、ロビイングする、圧力団体としての活動を、他の多くのアジア諸国と同様に、マレーシア社会はあつかいかねている。

コミュニティとは誰のことか

歴史的町並みの保全において、コミュニティは何より大切である。コミュニティが力を持ち、そしてイニシアティブをとって、自らの歴史をまもり、そして共存する。マレーシアでも、多くのアクションが取られてきた。たとえば複数の都市で NGO 団体のヘリテージトラストが設立された。そこでは、ミドルクラスの、英語を話す、高等教育を受けた、中国系が多数の、メディアに力のある、メンバーが市民の「啓蒙」を続けてきた。世界遺産登録に向けた世論の高まりも、かれらの取り組みの成果といってよい。

しかしショップハウスにテナントとして暮らす普通の市民は「コミュニティ」の一員として捉えられているのだろうか。残念ながら、市井の暮らしでは、彼らの住まう街の、建物の保存など気にかける余裕はない。かろうじてその動きを察知した、少数の彼らは、町並み保存の実施に伴う「補償金」の額をひたすら気にしている。

近年、「市民参加のワークショップ」がたびたび開かれる。そこでの、留学帰りのコーディネーターの流暢な英語と進行の巧みさには、いつも感心させられる。しかし福建語やタミル語のみを日ごろ愛する参加者に、何がどう伝わるのだろうか。コミュニティとはいったい誰のことか。

世界遺産へ:ストーリーを超えて

昨年 2002 年にペナンで開催された NGO 主催の国際会議「ペナン・ストーリー」は、外国人出席者も多く、盛大にとり行われた。識者の語るペナンの歴史の深さに、もちろん、ペナン人はあらたな「発見」をすることになった。しかし、その語りにあられる、史実のフラグメントは、町並みや遺産と日々向き合って生きる(生きねばならない)「コミュニティ

ー」への、これまでも幾多に繰り返されてきた、もう一つの投げかけにすぎなかった。我々は、町並み保存を通じて、手に余る、この多様さと今後どのようにむかい合えばいいのか。世界遺産で語るべき「文化的多様性と民族共存」へのパースペクティブはどのように示されるのか。

「ペナン・ストーリー」のフェアウエルパーティーは、市街地の同祖廟で、州首脳を招いて盛大に行われた。前庭の特設会場ではワインや料理がふるまわれた。しかし、その一見、きらびやかな宴は、多くの警官たちによって囲まれ、そしてまもられていた。

ペナンやマラッカでは、いま、町並み保存について、市民の熱い視線が注がれている。モスクの保存とワカフ・ランドの再開発、コロニアル建物の保存と孫文博物館の開館、リトルインディアの観光開発と街路整備、廟コミュニティ地区の観光開発。そして最近ではシンガポール人所有者の歴史建物の無断解体。センシティブな話題には枚挙にいとまがない。

いまや、マレーシアの町並み保存には、我が国で云う、地上げも絡む場合もある。マスコミもにぎやかだ。存在の確認できない日本人「研究者」が新聞の論壇に登場し、国の保存政策を正面切って批判する。建物所有者や購入者が名指しで攻撃され、さらされる。案件のいくつかは、すでに機関のモニタのもとにあるともきく。そこには、しばしば、非力な筆者のでる幕さえない。その詳細の記述は、しかるべき時をまちたい。

それでも、マレーシアの町並みの風景は、どこまでものびやかで美しい。いましばらく町並み保存を通じた、その空間の豊かさと、そして緊張の中に身をただよわせたいと思う。